

長野県立歴史館たより

2021年 冬号 vol.109

特集

郷愁の画家
丸山晚霞

没後80年

— 師友とその時代 —

没後80年 郷愁の画家 丸山晚霞 —師友とその時代—

当館では平成29年度より、冬季の企画として長野県ゆかりの人物に焦点を当てた展覧会を開催してきました。これまで、「博物館の父」田中芳男、山岳写真家田淵行男、そして洋画家・書家・コレクター中村不折を独自の視点から紹介しました。今年度は、東御市生まれの水彩画家・丸山晚霞ばん か（1867～1942）の芸術世界をご覧ください。

丸山晚霞は、慶応3年小県郡祢津西町（後に祢津村、現在の東御市）の生まれです。生家は、この地域で江戸期から盛んだった養蚕業を営む農家で、蚕種販売業もおこなっていました。晚霞は、父が横浜で買ってきた錦絵や印刷物を通じて、美術への憧れを募らせたといえます。

幼少の頃から鋭敏な感覚を持ち、信州の山河の美しさに畏敬の念を抱いてはいたものの、本格的に洋画を学ぶことは許されず、やむなく家業を手伝うことになりました。

ようやく念願の上京を果たしたのは、1888（明治21）年頃のことでした。晚霞は、明治洋画の先駆者本多錦吉郎ほん だ きんきちろうに入門して洋画の初歩を学びはじめます。経済的な理由から、数年後には帰郷を余儀なくされますが、家業の傍ら、信州や上州の自然を写生することに喜びを見いだす毎日をおくります。

そんなある日、群馬県内を写生旅行していた晚霞は、偶然にも吉田博ひろしという青年と出会います。吉田博（1876～1950）は後に水彩画家として、また木版画家として名を成すことになりましたが、当時はまだ駆け出しの若手洋画家でした。共に洋画を志す二人は、すぐに打ち解けて意気投合します。これ以後晚霞は、自信を持って信州や上州の山岳や田園風景と向き合い、実力を蓄えることができました。そして1898（明治31）年の初夏には、二人連れだって飛騨の山中までスケッチ旅行をおこない、多くの作品を残しています。

さらに、この年から翌年にかけては、郷里で制



丸山晚霞《新張》1898（明治31）年 丸山晚霞記念館蔵

作した作品を東京で開催される明治美術会展覧会に出品し、ようやく世の中に知られるようになります。さらに、展覧会を通じて、三宅克己こつき（1874～1954）と大下藤次郎とうじろう（1870～1911）という、日本を代表する水彩画家の知遇も得て、彼らの影響を受けつつ、独自の画風に磨きをかけていきます。

1900（明治33）年には、三人の仲間とともに、自作と片道切符を手にしてアメリカに渡ります。彼らの目的は、国内で描いた水彩画のグループ展をアメリカで開催して、その売上金を元にヨーロッパに渡ろうというものでした。果たして、全米各地で開催した水彩画展はいずれも大成功を収め、当時、多くの洋画家の夢であるヨーロッパ留学を果たすことができました。



明治33年、ボストン・アート・クラブにて。左端が丸山晚霞

帰国後の1902（明治35）年には、新しい洋画団体「太平洋画会」（現在の太平洋美術会）の創立に参画、同会の展覧会には終生出品を続けました。一方、郷里にあっては、「小諸義塾」の美術教師となり、同校の英語教師だった島崎藤村とも交遊



丸山晚霞《OSAIRI (長入)》水彩、紙 丸山晚霞記念館蔵
しています。

この時期、郷里祢津村で腰を据えて制作に専念した晚霞は代表作を次々と発表、押しも押されもせぬ水彩画家としての地位を確立します。その作品は、東京や地方都市での展覧会出品はもとより、雑誌の口絵や、当時大衆的な人気があった「絵はがき」となって全国に普及し、三宅克己、大下藤次郎と並んで人気を博しました。

1905（明治38）年、東京で講習会の開催や水彩画専門雑誌の創刊をつうじて水彩画の普及につとめていた大下藤次郎に協力するため、晚霞は郷里を離れて東京に拠点を移します。その後は、各地の風景を取材して回り精力的に制作をおこなう一方、日本水彩画会（大正2年）や日本山岳画協会（昭和11年）の創立会員となるなど、水彩画の普及にも貢献しています。

イギリスに起源を持つ「透明水彩」という技法を駆使して風景画の魅力を広めた晚霞ですが、日本の風景—とりわけ郷里祢津村にはひとかたならぬ愛情を持って制作にあたりました。晚霞の作品が、信州の田園風景に普遍的な美しさを与えたと言っても過言ではありません。その最大の魅力は、



丸山晚霞《霧のロンドン》1911～12（明治44～45）年 個人蔵

画家が現地で体感した雰囲気や「感じ」が、画面に息づいていることでしょう。

太平洋戦争中の1942（昭和17）年、生まれ故郷の小県郡祢津村に建設した自宅兼アトリエ「羽衣荘」で77歳の生涯を閉じますが、没後に開催された遺作展示を観覧した作家の上林暁は、「郷愁の画家」と評しました。時空を超えて観る者にどこか懐かしさを感じさせる晚霞作品の本質を、的確に表現した一言といえるでしょう。

ところで、アメリカ経由でヨーロッパ留学を果たした先駆者でもあり、国際的感覚を身につけていた晚霞の作品は、水彩画の本場イギリスやアメリカでも高い評価を受けています。今日でも、時折、米国人コレクターが出品した作品がオークション等に出品されることがありますが、その多くは明治33年の渡米時に展示した作品と考えられています。これは、晚霞をはじめとする日本人画家による水彩画が、100年以上にわたり英語圏で大切にされてきたことを意味しています。

本展は、明治期を中心に厳選した風景画の代表作を一堂に展示し、およそ1世紀前の日本に思いを馳せてもらうとともに、今も我々に強くうたえてくる作品の力の源泉を探ろうとするものです。加えて、明治20年代に相次いで来日して日本人の自然観や芸術観に影響を与えた英国人水彩画家、晚霞を洋画の世界に導いてくれた恩師本多錦吉郎、ともにアメリカ経由でヨーロッパを目指した河合新蔵、鹿子木孟郎、満谷国四郎、そして同時代に活躍した水彩画家—三宅克己、大下藤次郎、吉田博、中川八郎—を併せて紹介します。

さらに、長野県内の取材地については、「現代」の視点も取り入れながら、「環境」に対する問題意識の高まりの中でともすれば看過されがちな、「景観」もまたかけがえのない郷土の財産であるというメッセージを発信します。（林誠）

Information

会 期 ● 2022（令和4）年1月15日①～2月27日②

開館時間 ● 午前9時～午後4時（入館は午後3時半まで）

休 館 日 ● 毎週月曜日、及び2月24日

観 覧 料 ● 企画展のみ300円（大学生150円）

* 高校生以下無料。講座聴講は講座券（300円）または共通券が必要

* 会期中、作品の展示替えをおこないます。

前期：2月6日まで 後期：2月8日より

音楽再生の進歩と歴史

わたしたちが生活の中で楽しんでいる音楽。現在その購入・再生方法は多岐にわたり、ライフスタイルに合わせて選択することができます。店頭でCDを購入するだけでなく、インターネットによる注文や気に入った曲だけダウンロードすることもできます。音楽再生機器も時代とともにその種類が増えてきました。しかし、かつて音楽とは演奏を「その場で」聞くものでありました。コンサートは言うに及ばず、古くは儀式や祭礼などの場で演奏され、その記録は口伝や書物、楽譜という形によって残されてきたのです。



蓄音機 (当館蔵)

音楽の歴史の大きな変化は1877 (明治10) 年、エジソンによる円筒型蓄音機の発明に始まり、1887 (明治20) 年のエミール・ベルリナーが開発した円盤式レコードと再生用蓄音機へと続きます。

日本では1889 (明治22) 年、当時の鹿鳴館で公開されたという記録があり、当時は「^{そごんき}蘇言機」などの名称で紹介されていました。商法会議所での録音実演会において東京日日新聞社社長の^{ふくち}福地^{おうち}桜痴 (源一郎) が「コンナ機械ガデキルト新聞屋ハ困ル」と吹き込み、再生されたという逸話が残っています。

1891 (明治24) 年には早くも国産蓄音機が開発されていますが、まだこの頃は国内で録音し、レコードを製造する技術はなかったため、外国人が日本に機材一式を持って来日し、録音した原盤を本国に持ち帰って製品化したものを輸出すると

いう方法で日本国内にレコードが流通しました。主に蓄音機で再生するSPレコードは、1分間に約78回転し再生時間は片面約5分でした。針は主に鉄針で、摩耗するため片面を再生するたびに交換しなくてはならず、手間のかかる贅沢品ではありましたが、好きな時に好きな音楽を聞くことができるようになったことは人びとの生活や心をより豊かにしていったことでしょう。その後、1915 (大正4) 年真空管を使って電流を制



真空管式ステレオ (当館蔵)

御、増幅する仕組みを利用した真空管ラジオが登場し、SP・LPレコードを再生することができるオーディオ製品も発売されるようになりました。

電源を入れてからしばらく時間がかかるものの、あたたかみのある音が再生されます。当館所蔵のパナソニック社製真空管式ステレオは、レコードの再生に加えてAM・FM・短波放送まで受信できるタイプです。1962 (昭和37) 年製ですが、一つの製品にいくつもの機能を盛り込むという「オールインワン」への挑戦が感じられます。

蓄音機が発明されてから約150年。録音・再生時間の長いLPレコード、真空管式ステレオ、カセットテープ、CDなどが開発され、音楽に関する技術は飛躍的に進歩して現在に至っています。現在の機器に比べて手間や時間がかかりますが、音が流れるまでの「間」に期待が膨らみ、録音当時の空気まで記録されたようなあたたかみのある音楽が再生されます。技術の進歩の歴史を感じながら、こうしたアナログ機器による音楽にも耳を傾けてみてはどうでしょうか。 (内城正登)

目指すかたちと機能が語る“匠の技”

—小諸市岩下遺跡の石槍—

浅間山の南麓、小諸市岩下遺跡から1点の石槍が出土しました。岩下遺跡では、縄文時代前期後半、後期前半、古墳時代、平安時代、中世から近世にかけての住居跡などが見つかり、人々が長期間、断続的に生活していました。

中でも、縄文時代後期前半（今から約4,000年前）の集落は、住居跡と長さ約25メートルの大規模な弧状の石列が見つかり注目されています。

石に打撃を加えて先端を尖らせ、刺突することを目的として作られた石器を「尖頭器」と呼び、槍の穂先として装着されたと考えられているため、槍先形尖頭器、石槍と呼んでいます。

この石槍は、平面が細長く、横方向の断面の形状（A～E）が不均一であることなどで旧石器時代の石槍とは異なり、おそらく縄文時代の石槍と考えられます。ここでは、この1点の石槍にはどのような情報があるのか、肉眼で読み取ります。

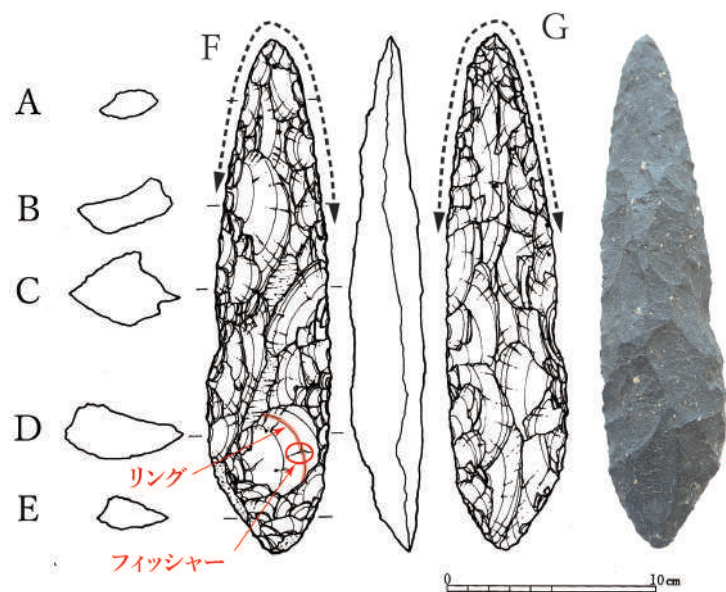
石材は、石材に含まれる斑晶などから、遺跡の東約15kmにある八風山産出のガラス質黒色安山岩（無斑晶質安山岩）と推測されます。

時期は異なりますが約36,800年前の国内最古の石刃石器群となるのではと新聞報道などで注目されている佐久市香坂山遺跡や、八風山遺跡群（石刃石器群、石槍製作跡等）、下茂内遺跡（石槍製作跡）で、八風山産出のガラス質黒色安山岩を石器製作の素材として使っていました。

実測図は石槍観察を通して、製作工程を確認しながら作成します。実測図にすると、わかりにくかった、石を割った後に残される波紋（リング）と、打撃を加えた場所から放射状に広がる筋（フィッシャー）がわかりやすく表現されます。石器に残された加工の痕跡の大小とリングとフィッシャーの描き方で、石を加工していく順番を示すことができます。観察や実測図作成を通して、この石槍で最後に加工を施したのは、破線で示したFとGの部分とわかりました。さらに横断面Aの部分、凸レンズ状で薄く両刃となっており、細かな加工があります。一方、横断面B～Eから加工の様子を観察すると、薄い凸レンズ状にすることを意識せずに、全体に細長い形状を作る

ために石槍の幅を狭めていくことを優先した加工と考えられます。

刃部の作りから、この石槍の機能部位（使う場所）は先端部分で、対象となる動物などを突いて、左右に直線的（両刃のため）に切る道具と考えられます。製作技術から見ると、旧石器時代から縄文時代草創期の厚さ1cmに満たない凸レンズ状で均整のとれた石槍に見られる加工の技術との差は大きいと思われますが、先端で突いて、切る機能に特化し製作したと考えれば機能優先で効率的に作られた“匠の技”とも思われます。（近藤尚義）



岩下遺跡出土の石槍（当館蔵）

「区会条例裁令書」 南佐久郡役所

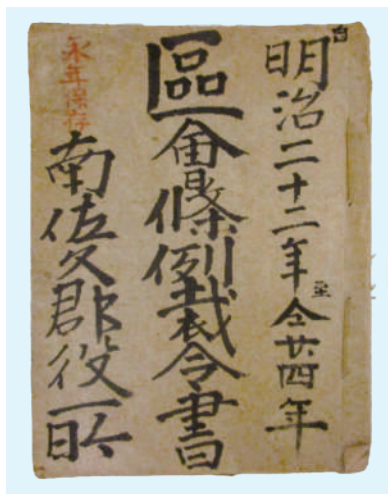


写真1 綴の表紙「永年保存」とある 1888（明治21）年に公布された市制・町村制が地方行政の根拠となり、各自治体は内務省の権限のもとにおかれていました。

今回紹介する「区会条例裁令書」（当館蔵）（写真1）は、1889（明治22）年に合併し、新しく発足した南佐久郡の町村に対して内務省が、区会設置を認めた許可書（原本）を南佐久郡役所が綴った行政文書で、現在の佐久地域振興局が保管していたものです。

市制・町村制公布の翌年から、小規模町村の合併が進んでいきます。そのいっぽうで「区会条例裁令書」にみられるように、旧来からあった村びとから区会設置の要望が出され、内務省もそれを認めていきます。内務省はなぜこのような動きを無視できなかったのでしょうか。

写真2にあるのは合併により発足した野沢村（佐久市野沢）について記されている箇所です。「内務省許丁第一八四七号」とあり、「明治二十二年十一月二日稟請乙第一九五四号長野縣南佐久郡野沢村条例高柳鍛冶屋取出町本新町原野沢跡部三塚区会ニ関スル件 右町村制第百廿五条ニ依リ之ヲ許可ス」とあります。認めたのは、当時の内務大臣山県有朋でした。「稟請」というのは下の機

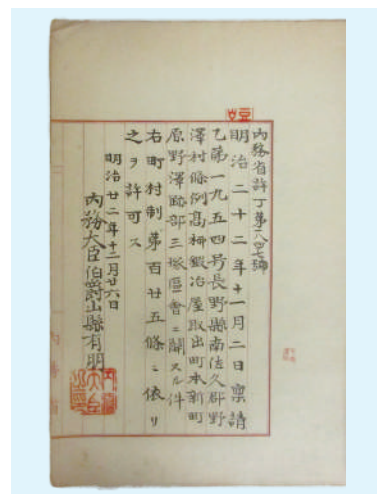
戦後、地方自治法が制定され、地方自治体と国は対等な関係となっていますが、明治憲法の下では地方自治の規定はありませんでした。

関から上へ申し上げて申請すること、町村制第125条とは、町村条例の制定・改正には内務大臣の許可が必要であることが定められている条文です。町村条例の制定や改廃も内務大臣の許可が必要だったことがわかります。

この翌年の3月、三塚区会議員選挙が行われました。町村会議員、区会議員の選挙人は納税額によって一級選挙人と二級選挙人に分けられていました。新しく発足した野沢村のなかで、区会設置の単位となったのは、江戸時代より続く伝統的な村でした。

南佐久郡南牧村海ノ口でも1890（明治23）年区会設置が認められています。1920（大正9）年の区会議員選挙では激しい選挙戦がくりひろげられ1票10円で売買されるような不正も行われるほどだったようです。激しい選挙戦がくりひろげられた背景には、区有山林の利権が絡んでいました。町村会議員より大きな財産を動かしたのは区会議員であったと当時の新聞は伝えています。

区会設置は明治以前より続く、区有財産や慣行を無視できなかったことが背景にあるといえます。合併した村が再び、明治以前の村



を単位として 写真2 内務省許丁第一八四七号 別べつの区会を設置するよう要求したケースもあります。区会設置の問題は近代の村がどのようにして生まれてきたのかを考える重要な視点になります。そうです。（入沢昌基）

遺跡立地の地域性

～遺跡に立って、空気を感じる～

縄文時代は、10,000年以上もの長い間続き、日本文化の形成に深く関わりました。「土器の発明」や「定住生活の開始」に特徴があり、新石器時代に位置づけられています。人類が一定の場所に、比較的長期にわたり居を構え、複数の単位（家族・親族など）が寄り添い合って集落を営むには、食料の獲得法や調理法の発達が不可欠であったと考えられます。

安定した集落の営みが、人の交流や物流を活発化し、経済そして社会の発展を促しました。そのような社会の成熟期を迎えるのが、縄文時代前期、今から8,000年前の地球温暖期にあたります。

発掘調査で発見される集落跡には、住居跡や建物跡の発見数、それらの構造的差異（構造物の規模や配置の在り方）が認められますが、集落跡の発見される場所（遺跡のある所：遺跡立地）にも違いを見出すことができます。特に定住の安定する縄文時代前期からは、遺跡立地の違いが目立つようになります。

県立歴史館が出土品を所蔵する長野市松原遺跡は、縄文時代前期終末から中期初頭を中心とする大きな集落跡です。「トロフィー形土器」の愛称で呼ばれる^{はれがみね}晴ヶ峯式土器の深鉢を始め、「块状」や「の字状」の石製品（装飾具か）が数多くあります。千曲川に近い自然堤防上の開けた低地帯（低いところ）、標高350mに遺跡は立地しています。

一方、同じ様な「トロフィー形土器」が出土し、ほぼ同時期に中心がある下諏訪町武居林遺跡は、和田峠にも近く、黒曜石を多出する集落跡として古くから知られています。諏訪湖を望み、遠望の利く、山間部の^{ぜつじょう}舌状台地上（高いところ）、標高850mに立地しています。

2つの遺跡地は、実際にその場所に立ちますと、まったく違う景観、雰囲気（住居を構え生活する上での環境）を味わうことができます。それぞれの集落遺跡が担った経済的・社会的な位置には、もちろん違いを予想できますが、地勢に基づく生活環境の違い、狭い意味での「地域性」が遺跡に



千曲川沿いの低地帯（屋代遺跡群）

強く反映されているように思えてなりません。

縄文時代終末期、米づくりの情報伝達が確実に視される氷式土器の時期にも、やはり同じような「地域性」がみられます。当館が出土品の一部を所蔵する小諸市氷遺跡と茅野市御社宮司遺跡では、立地がまったく異なっています。前者は千曲川に面した段丘上（高いところ：千曲川との比高差約50m）にあり、後者は諏訪湖に注ぐ宮川と上川に挟まれた低湿地帯（低いところ：諏訪湖との比高差約22m）にあります。

食糧生産が本格化する弥生時代には、縄文文化にみられたような「地域性」が継承され、稲作形態に大きな影響を与えたと考えられます。水田稲作を根幹とする生産形態は、低いところに生産の場（生産域）を選定し、居住の場（集落域）はその近傍に設営されることになりました。また一方で、畑作物を中心とする稲作形態は、段丘上のような高いところに定着、発展していきました。前者は善光寺平に、後者は伊那谷にといったように、農業生産を軸とする新しい地域性、弥生文化の広い意味での「地域性」が、やがて確立していったと考えられます。

この新しい「地域性」が、信州の「風土」を形成するひとつの要因となりました。（町田勝則）

文献

- 1998年『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書4松原遺跡縄文時代』長野県埋蔵文化財センター
- 1979年 中村龍雄『諸磯C式比定土器』
- 1998年『氷遺跡発掘調査資料図譜』氷遺跡第二次発掘調査団
- 1982年『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 茅野市その5』長野県教育委員会

INFORMATION

インフォメーション

■ 2021(令和3)年12月～2022(令和4)年3月の行事予定

12月

休館日
6・13
20・
27～31

新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、講座・イベント等につきましては、状況により急遽中止とさせていただきます。ご了承ください。

講座・イベント

考古学講座⑤

12月11日(土) 13:30～

「時代の画期と暮らしの変化2」

講師：町田勝則（当館考古資料課長）

1月

休館日
1～3
11・17
24・31

冬季企画展

没後80年
郷愁の画家 丸山晚霞
—師友とその時代—

1月15日(土)～2月27日(日)

■講演会

1月29日(土) 13:30～

講師：佐藤聡史氏（丸山晚霞記念館長）

演題「丸山晚霞の立志

—憧れの地アメリカ、
ヨーロッパへ—

定員80名（事前予約制）

■講座

2月5日(土) 13:30～

講師：林 誠（当館学芸員）

演題「丸山晚霞の生涯と芸術」

定員80名（事前予約制）

県立歴史館の信州学講座

第4回 1月22日(土)

「遺跡が語る比類なき風土」

講師：町田勝則（当館考古資料課長）

特設考古学講座③

1月29日(土) 13:30～

「縄文時代・弥生時代の骨を調べてみよう」

講師：鶴田典昭（当館学芸員）

県立歴史館の信州学講座

第5回 2月12日(土) 13:30～

「青緑色のめくもりを未来へ」

講師：近藤尚義（当館学芸員）

2月

休館日
7・14
21・24
28

春季展

所蔵品展
至宝の名品
—学芸員のイチオシ
考古資料編—

3月19日(土)～6月12日(日)

県立歴史館の信州学講座

第6回 3月5日(土) 13:30～

「ものづくりの進化は続く」

講師：村石正行（当館文献史料課長）

3月

休館日
1～4
7・14
22・28

表紙写真の解説

冬枯れの信州風景。晚霞の郷里、祢津村（現東御市）の情景と伝えられる。丹念な点描と細密描写、小さく添えられた点景人物、そしてサインの特徴などから、明治30年代初頭の制作と考えられる。

行事アルバム

***** 歴史館で夏休み *****



8月1日(日)、「歴史館で夏休み」へ大勢の皆様にご来館いただきました。今年は新型コロナウイルス感染防止に配慮をしたイベントとして「土器のレプリカ作り」「クイズにチャレンジ」を実施しました。色を工夫しながら自分だけの土器を楽しく制作しました。当日は蓄音機の演奏も行われました。

***** 秋季企画展 *****



9月18日から11月23日まで秋季企画展「全盛期の縄文土器一圧倒する褶曲文」が開催されました。縄文時代の人々の創意工夫や思いがこもった県内外の縄文土器113点を展示し、多くの皆様にご覧いただきました。

長野県立歴史館たより 冬号 vol.109

2021(令和3)年12月10日発行
編集・発行 長野県立歴史館

〒387-0007 千曲市屋代260-6
電話 026-274-2000(代) FAX 026-274-3996
E-mail: rekishikan@pref.nagano.lg.jp
ホームページ: <https://www.npmh.net/>

印刷 奥山印刷工業株式会社